

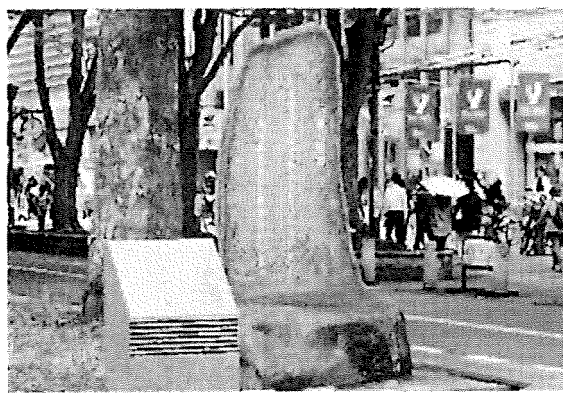
防人の妻 哀情を歌に

文人の 武蔵野

前回は、「武蔵国」が為政者の政策の所産としての「国」の名であり、その点で「武蔵野」とは異なることを確認しました。今回は、地政学的な立場から、「武蔵国」と「武蔵野」との関連を考察してみよう。

「万葉集」巻十四には、東歌として武蔵国の歌が9首収められています。その中には「武蔵野」という地名を詠んだ歌が5首あります。中には秘めた恋の歌もありました。同じく巻二十には、防人歌として「武蔵国で詠まれた歌」

「武蔵野」とは ④



京王線府中駅近くに立つ万葉歌碑。「武蔵野」の地名が詠まれている（府中市で）

というカテゴリがあり、12首が収められています。その中には、「我が背なを筑紫へ遣りて愛しみ帯は解かなあやにかも寝も」（4422）のように、夫（背な）を防人

（筑紫）に取られた妻の哀情が詠まれた歌が複数あります。

「帯は解かなあ」（帯は解かないで）の「なな」は、東国方言です。艶っぽい表現ですが、現実には、強制的に家族を兵に取られている訳で、不満があってもおかしくありません。しかし、「万葉集」では、愛する男に旅立たれる女の哀しみは歌われても、哀しみの元になる制度そのものに、言葉の刃が向けられることはありませんでした。

防人は、対外的な警備のために筑紫地方（九州北部）に派遣されて兵士の役割を担った者たちのことです。江戸の参勤交代や近代日本の徴兵制、日本株式会社の単身赴任制によく似た発想ですが、出身地域が限られている点が違います。任命されたのは、東国の武蔵国と周辺諸国一帯、すなわち武蔵野の住民でし

た。

辺地の男たちの間には、東アジア情勢を巡る地政学的な危機意識は薄かったでしょう。武蔵野から防人が選ばれたのは、東国の農民の腕っぷしが買われたからだと言われていますが、徴兵することです対外的な危機感を醸成し、「お国」を超えた「国家」への忠誠を覚えさせようとする狙いがあったのかもしれない。

言葉の上で、民はお上の意思をどう受けとめ得るのか。都から伝わる文化をどう受けとめ得るのか。武蔵国で詠まれた防人歌は、そのひな型になったと言えそうです。（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。

